



学校だより

子どもの「やる気」を育てます

2月号 令和7年1月31日
 西東京市立保谷第一小学校
 校長 原 之 雄
 〒202-0004 西東京市下保谷1-4-4
 TEL042-422-4513 FAX042-424-7117
<http://www.nishitokyo.ed.jp/e-houyal/>
 e-mail e-houyal@nishitokyo.ed.jp

保谷第一小ホームページ
 QRコード



世界に誇れる「日本人」のよさとは

生活指導主任

2025年がスタートして、1か月が経ちました。みなさん、1年のよいスタートダッシュを切ることができましたか？かくいう私は、人生で初めて大晦日に発熱し、三が日を寝て過ごすという最悪のスタートでした。(トホホ)せっかく楽しみにしていた年末年始が…。と、悔やんでも悔やみきれない思っていたのですが、「このままでは終われないぞ!!」と思い立ち、冬休みの最終日に、海外で絶賛されているという一本の映画を観に行きました。その映画は「小学校～それは小さな社会～」という、山崎エマ監督のドキュメンタリー作品です。

この映画は、世田谷区の公立小学校に密着し、1年生と6年生の日常の学校生活を撮影したものです。この作品を観てみたいと思ったきっかけは、ホームページに書かれていた次の言葉でした。

**6歳児は世界のどこでも同じようだけど、
 12歳になる頃には、日本の子どもは『日本人』になっている。**

「この言葉は一体どういう意味なのだろう？」この言葉の意味を、三が日に布団にもぐり込みながらずっと考えていた私は、どうしてもその答えが知りたくなったのです。

実際に映画を見てみると、その言葉の意味がよく分かりました。流れてくる映像は、子どもたちが給食の配膳をしたり、委員会の活動に取り組んだり、6年生が1年生のお世話をしたり、合奏の練習を怠った児童が叱られたり、励まされたり…。保谷第一小学校となんら変わらない「小学校の日常」の風景でした。しかし、改めて「日本人になるとは？」という視点で作品を見てみると、日本の小学校教育が「学習面だけではなく、子どもたちの社会生活における協調性、マナー、道徳的価値なども育てている」ということがよく分かりました。

海外の人たちが、こんな話をしているのを聞いたことはありませんか？

「日本人は電車に乗る時、きちんとホームに整列している…。信じられない!!」

「落とした物が交番にきちんと届けられるなんて…。アメージング!!」

「スタジアムを去る前に、ゴミ拾いをして帰るのが日本の文化なのか!？」 などなど。

日本の教育で「子どもたちの個性を伸ばしているのか？」という疑問はよく耳にします。もちろん、それらの課題を解決していく為に「個別最適な学び」の充実など、私たち教員も日頃から研鑽を積んでいるところです。しかし、今の小学校教育にも、世界に「誇れるところ」はあるということです。

保谷第一小学校の子どもたちは、とても温かく、周りのことを考えられる子ばかりです。今、私が担任をしている6年生の子どもたちは、掃除の当番でなくても黒板をキレイにしたり、落ちていたゴミを拾ったりしています。給食当番の人手が足りない時には、すすんで手伝いをしています。図書室の本棚が乱雑な時には、誰に言われるでもなく整理をしています。あいさつ運動に全力で取り組んで、下級生に元気を与えています。

小学校で学ぶことと言えば「学習」を思い浮かべる方が多いでしょう。しかし、それ以上に「生活」に直結する大切なことを学ぶ場でもあるのです。小学校の6年間で子どもたちが身に付けたもの、学んだものは、いずれ世界に誇れる子どもたちの「大きな武器」になっていきます。今後も、学校と家庭、地域と連携をとりながら、子どもたちの「世界に誇れる力」を伸ばしていきたいと思っていますので、今年も変わらぬご支援・ご協力をお願い致します。